

地域の会 第7回臨時会を終えて（委員感想）

（欠席委員は日頃思っていることなど）

【委員】

- 仕事上や体調によって、地域の会に欠席する事が多く、大変申し訳なく思っております。各委員のみなさん、勉強をされていて、又自分の考えをしっかりとっておられることに感心するばかりです。自分の知識のなさ等を恥じることが多いです。
- 歳を重ねると、体調を崩したり体のあちこちが痛くなったりします。原子力発電所の高齢化には関心が高いものがあります。人間だったら「少くく痛くても我慢を…」となっても、こと原発となるとどうなの？という点です。部品を交換して、メンテナンスをして、といってもはたして40年、50年ともつのだろうか？自分で入院等を体験して原子力発電所に重ね合わせてみると、少し怖い感じがします。
- 出来るだけ出席したいと思っています。今後とも宜しくお願いします。

【委員】

- 地域の会の役割について

柏崎の市民としては将来にわたって、柏崎刈羽原子力発電所とは共存していかざるを得ない状況は変わりのないことからすべては始まる。

2003年の東京電力による不祥事を契機にしてできた「地域の会」は、市民にとっては東京電力及び市・県・国が進める原子力政策を公開の場で、その情報を共有できる重要な存在であると考えます。原発と共存してゆくには、安全・安心の担保される原子力発電所であってほしいと思うことは市民共通の願いだからです。

「・・・原発政策は国会議員でさえタッチできない内閣の専権事項、つまり政府の決めることで、その意を受けた原子力委員会の力が大きいということだった。・・・その実態は霞が関ががちり握っている。・・・立地している自治体には全く手が出せない問題だということが、私の在任中に起こった数々の事故・・・情報の隠ぺいでよくわかった（佐藤栄佐久元福島県知事）」との考え方もあります。とすれば「地域の会」の存在は、ますます重要になるという強い印象を受けました。

【委員】

- 地域の会会則第1条の目的の中で発電所の安全性・透明性確保に関する事業者の取り組みと記載されているように、東京電力は本来これらの文言を守っての業務を行っていると思うが普通考えられない単純な事故が頻繁に起きている。なぜか。
 - ・ 度重なる火災事故はその一つであるが、社員教育というよりは個人教育がなされてい

るのか。

- ・ またマンネリ化した自己満足に浸っているのではないか。
 - ・ もっと管理体制を徹底し人事異動など定期的にすべきではないか。
- 各号機の機器、建屋の老朽度はどう取り組んでいるのでしょうか。機器、建屋の耐用年数はあるのか。あるとすれば入れ替えなど履行されているのか。
- ・ 新しい物に取り替えれば事故が起こらないとは限らないが、無理をし、我慢をして使用しているものはないか。
 - ・ このようなことがいつも事故が起きてから問題になる。それが、ひび割れや漏れの原因になっていないか。
 - ・ になっていないとすれば理由を聞きたい。
- 1号機の起動試験の際、先般の説明でタービン駆動原子炉給水ポンプ吐き出弁などにシートリーク、弁を閉めても予想以上の水が逆流していくなどの疑いが確認されプラント起動試験を一時止め、その後復旧したようであるが完全に閉まりきらなかった原因は何か具体的な説明がほしい。また、1号機の機器のひび割れは解除されたのかどうか。
- 地域の会は毎月行っているが2ヶ月に1回は少ないからか。

【委員】

- 前回欠席したので申し訳ありませんでした。何を話されたのか知らないのですが、日頃思っていることと言われても、漠然とした考えしか浮かばず困惑しています。

【委員】

日頃思っていること

- 定例会では、保安院や東京電力による説明時間が長すぎるため、各委員の質問時間が少なくなったり、又委員同士の議論ができなくなったりして不都合なことが多い。もっと質問時間を長く取り、委員間の議論が十分できるような時間配分をお願いしたい。
- 今、日本でも原発の解体が始まっている。NHKテレビ等の報道を見ると、原子炉や配管に残っている放射性物質を、絶対に外に漏らさないように解体しなければならないことから、解体作業が大変困難になっているということです。私たち、地域の会でも原発の解体について早急に学習しなければならないと感じました。
- プルサーマルが実施され始めたり、「もんじゅ」が動き始めたりで安全性や技術的な問題では大きな疑問が残ります。私たち地域の会の委員として、一定の学習をした上でこれらの問題についてどう考えるのか、真剣に議論する必要があるのではないかと思います。

【委員】

- 会場も、司会者も定例会と違って雰囲気良かった。更に、委員一人一人が真剣に考えている事が伝わった。「地域の会」が今後、不必要という意見は一つもなかった。立場が違い、考え方はもちろん違うが、共通するところはいくつかある。
- ・ 発電所の運転に対する保安上の意見
 - ・ それぞれ違う「立場」も重んじたら良い
 - ・ 意見が一つにまとまることがないが、真剣さは、行政、企業への意見の働きかけになったと思う。

- ・ 委員とオブザーバーとコミュニケーションが出来たと思う。
 - ・ 説明者の技術的な面と受けとめる方のギャップは大きいですが、話し易い基盤が大切、又、緊張感も大切。
 - ・ ・ ・等、うなずける意見も多かった。
- 課題として、「県外視察」「任期」「委員公募」「定例会の回数」「視点の内容」があるが、委員で話し合っ、良い方向づけをしたい。

【委員】

- 地域の住民の代表として発電所の安全性の確保を願って地域の会に参加させていただいております。専門用語で判りづらいこともあります。前回以降の動き等の報告をお聞きし、質疑応答しながら東電や各部門の対応や考え方などを知ることが出来ます。
- ニュースアトムや原子力安全・保安院通信や、資源エネルギー庁のスマイル他でいろいろな情報を見聞き、知識を広めることが出来ますが、地域住民が誰でも判りやすい用語や言葉で発信できる方が良いのではないのでしょうか？攻撃的な質疑も大切ですが、ホットなニュースが東京電力との絆や信頼関係につながるのではないのでしょうか。地域住民と東京電力との共存共栄のために努めましょう。
- 今後の審議について
- ・ 柏崎刈羽原子力発電所の40年、50年の運転継続の取り組みについて
 - ・ 全号機運転再開後のプルサーマル計画について

【委員】

ここ3年間は、中越沖地震に係わる議論が集中した。災害に対する安全性が我々の想像以上の結果を見せ付けられ、今まで考え、想定した事象を大きく上回る現象を見せ付けられた。「安全は何を基準にしたのか？」など、堂々巡りの試行錯誤に陥ることが多かった。私自身は原発の必要性は十分把握していながらも、今、3機の原子炉稼動にもその不安は払拭できないのが心境である。

それには、東電の事故の多さが先ず気にかかる。「緊急車が北に向かえばまた東電事故か」と言われるくらいに、地域の住民にとっては恐怖の原因、いや不安原因であり信頼の出来ない根拠となっている。

そのような事から、これからの「地域の会」も、「構造物や原子炉、放射能漏れ」の安全確認の必要性は重々承知しながらも、これらの判断は我々のような素人では到底出来るものではないと思う。しかも、数的な結果や専門用語・知識で安全性を証明されても我々は反論する術を知らない。もう少し具体的な話や企業の安全性・感覚について等、地域住民の感覚でわかりやすい場が欲しくなった。

【委員】

今回開催について、会長、運営委員の的を得た決断に敬意を表します。

3年前の中越沖地震発生後、委員の会議における提言について、又オブザーバーの発言に、設立時の会の会則との対比で、全体を見直すと共に、新しい方向性を示すためにも“隋より始めよ”となりました。

先ず、会則第1条の目的を改めて認識し、理解した上での地域住民へのライフワークの

上で安全性は何か、そのためにも安心できる情報、提言を、より確保することと、強化すべきです。

又、国、自治体の活動への牽制強化を図り、電力業者へ対しても、より安全・安心な経営姿勢の基で、新しいエコ時代のエネルギー政策を推進していただきたい。大切な事は、関係者のコミュニケーション強化のため、互いに努力をする事であると認識した。

第2は、地震による事故発生来、処理経過等で、委員間での一部政治的発言等が、口言及び行動として見えた点も、私は、会則面での対比すべき事と思われたので、自身も反省すべく今後に対処したい。

【委員】

6 / 2 3に参加された方々のコミュニケーションに関する考え方が、立場は違えど住民として同じ方向を向いているなど感じました。

地域の会はデリケートな空気、体感の共有からも多くの伝達がされる場であり、新しい委員さんや一般住民の方々に、新しい方法の一つとしてこの空気を伝えていくのもこれからの役割かと感じました。

地道にコツコツと無理をせず働く働き方も研究の余地ありだと思います。

【委員】

○地域の会の役割について

3年経って私なりに思うことは、月一回の定例会にはちょうど良い緊張感がある様に思います。委員とオブザーバーはもとより、委員同士、オブザーバー同士の間にもこの関係はあると思います。これは8年間の長い間、継続してきて出来上がったものだと感じています。また、住民目線の質問や角度、切り口を変えた提言には、オブザーバーの皆様は、なるほどとうなずいたり、感心したり、また考えさせられたりすることが、1度や2度ではないかと思っています。この緊張感とその場の雰囲気は、“視点”には良く出ていると思っています。また、“視点”を読んでいる住民の多さには驚いています。

今後の会の方向性は、紆余曲折はあったにせよ、大きな流れは今までのやり方で良い様に思っています。緊張感の持続こそ大事だと思います。

○日頃思っていること

難しかったり解かりにくい言葉や単語、的が絞りにくいテーマ等々には、事前に資料の配布など行えたら、もっと多くの意見・質問・提言など発信できるのではと思っています。

【委員】

- 1、中越沖地震から3年が経過をし、7号機、6号機に続きまもなく1号機が営業運転に入ろうとしている。
- 2、この3年間に地域の会は、市民の安全安心のためにどのような役割を果たしたかと自問自答したが、自信のある回答は出せない。
- 3、それは再びこの地を大きな地震が襲うことはないのか。そして原発は再び同じような被害に遭わないのかということである。
- 4、原発建設計画が公表された当時から、地盤問題、陸地にある断層と地震の影響が随分と議論されてきたからである。中越沖地震は海底の断層が動き大きな地震を引き起こした。

ということは、当時から指摘されていた陸地の断層が今後動く可能性は否定できないのである。

5、今回の運転再開にあたっては、多くの専門家が東京電力の報告を精査し結論を出したものである。これを決定的な誤りがあると指摘するような知識も能力もない。しかし、地震をはじめとした地震災害は人類の英知を持ってしても克服できない気まぐれさがある。どんなに完璧だと言われても、一定の大きさのリスクは必ず存在すると思えなければならない。

6、今回の地震被害を契機として、原発の安全を確保するための審査体制の組織、機構、機能、人事などについての多くの問題を改めて認識した。

7、こうした問題は、市民レベルの地域の会の果す役割には荷が重すぎたというのが実感である。

しかし存在が無意味かと言うと次元は別である。今まで聞き流されたり、無視されてきた市民レベルの意見、主張、疑問の声を受け止める場所として8年以上にわたって存在しているという意味は極めて大きい。

8、今後も委員同士で、それぞれの立場を理解し尊重しながら率直な意見を述べられる環境を確保していくことが大切である。